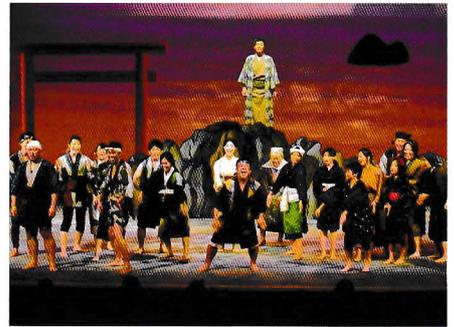


風と土と海と ～劇団BBB公演『石の海』～

五十嵐 隆 (元・八戸商業高校演劇愛好会顧問)



道楽屋写真部
太田治撮影



昔々、嵐の翌朝、あるムラの浜に一人の見知らぬ男が漂着した。村長達は「ムラの秘密」を守るため男を排除しようとするが、村長の娘は次第に流れ着いた男に惹かれていく。よそ者の存在は共同体を大きく揺るがし、最終的に大津波によって物語カタストロフをむかえる。残ったのは、家々の土台だった、石ばかり……。

小寺隆留の戯曲『石の海』は、民間伝承の基本バターンの一つであるマレピト譚をベースとした、神話ともいべき物語である。

昭和五十七年、八戸北高校演劇部によって初演されたこの作品は、今秋十月一日・二日、青森市民センターで、劇団BBBによって上演された。演出の森田誠は二十五年前、八戸北高の演劇部員だった。高校演劇バージョンでは一大スベクタクル群像劇だった『石の海』は、今回の劇団BBB版では村長・孫七の苦悩と葛藤を軸に描く「人間ドラマ」という方向に

演出の針を振っていたようだ。昭和6年、小寺隆留は青森市に生まれた。高校は青森、大学も弘前。紛れもなく津軽の人である小寺がその演劇の才を存分に発揮したのは、南部・八戸の地だった。

小寺隆留の代表作と言え、昭和四十七年に高校演劇コンクールで全国最優秀を受賞した『かげの砦』ということになるだろう。しかし同作品や、同じく全国最優秀賞を獲得した『てのひらの雪ひとつぶの消えるまで』にしても。また、その他の小寺作品の中にも。そこに私は八戸の風土を感じるものが出来ない。確かに小寺作品は、舞台言語としてデフォルメされた南部弁が採用されていることが多い。しかしそれらの物語は舞台が南部である必然性も無ければ、舞台で南部弁が交わされる必然性も無い。それらは、おそらくは小寺が八戸で暮らすことが無かったとしても書き上げることが出来た、『脳内世界』の作品なのだ。だけど、『石の海』は違う。

『石の海』のモデルとなった階上・小舟渡の海岸に、私は何度か足を運んだことがある。夜明け前の海はどこまでも深く、冥(くら)い。湿気と塩分を含んだやませが吹き、どどんどどんと海鳴りが響く。明け方が近づくにつれ大きく響いていく海猫の声。人の営みの喜劇・悲劇など関知すらしな、深く冥く広がる大海原。この海は、ここにしかない。

散々「人間のドラマ」を描いてきた小寺隆留が、陸奥湾を見遠かすでもなく、岩木山を仰ぎ見るでもなく、齢五十を超え、この小舟渡の海を見渡して思ったことは何だったのだろうか？ それは猪口才な人間の営みなど意にも介さない、石と岩の海岸。その遙か向こうに広がる圧倒的な海。そんな八戸の峻烈な風と土と海とを、舞台で描こうという思いではなかったか。『石の海』という作品を描くことで、はじめて劇作家・小寺隆留は八戸の風土に着地した。そんな気がしてならない。

技術的に高い舞台を作ることや豊かな感情表現の舞台を作ること、幾つかの条件が揃えば可能だ。だが、小寺演劇は「そういうコト」の先には無い(技術的な観点からすれば小寺隆留の作劇は穴だらけである)。芸術でも創造でも、表現ですらなく。いま、この場に存る魂の震え、儂さ。時にそれを鼓舞し、時に祝福し、時に鎮魂する。舞台とは、そんな巫祝のための装置。それが小寺の演劇観の根本にあるように思う。巫祝の基本は「自分たちを取り囲む風と土の描写」である。その意味で、小賢しく生きる人間達のムラを潰してまで善悪醜美の彼岸を超えた海を描くこの作品は、まさに小寺演劇の極致だと言えないだろうか。どんな形であれ、この脚本に再び命が吹き込まれたことを喜ばしく思う。

Friday Amusement Negative Shop ○FANS878~882回 「だべり場 2010.12」 12/3,10,31 19:30start 12/4 14:00start 入場無料:夢を語る場です

演劇空間 **スペースベン** ■八戸市柏崎1-11-8
 TEL. 0178-43-9876
 FAX. 050-3588-8350
 携帯. 080-6025-0990

※特別番組以外全て午後7時30分～、料金/一般前売400円 高校生以下100円(当日100円増)
 ※チケットはスペースベンにて販売。スペースベンの上演内容は、ホームページまたはメールマガジンでご確認下さい。
 [HP] <http://spaceben.com/> [Eメール] owner@spaceben.com

12月号好評発売中!

●今月のテーマエッセイ **支度**

墨の香……………	平島	正義
45……………	山本	まゆ
人生是れ支度……………	柳	み宏
夢の支度……………	松坂	朋久
自分を律する……………	霞	久正
猫だまし……………	田中	悦子

八戸の月刊誌 **うみねこ**
 Heichine Monthly UMINECO
 12月号 2010 544号

●今月のインタビュー
 しのたか接骨院 院長
 篠原 貴久さん(33歳)に聞く

読む楽し **読物満載**
 毎月ご愛読ありがとうございます

発行所/うみねこ出版社
 八戸市六日町10いわとくパルコ3F
 TEL・FAX 0178-44-6636